

特別な読み方をする漢字

校長 佐々木 雅哉

今日も、元気に子どもたちを送り出してくださり、ありがとうございます。暑い日が続いた夏が過ぎようとしています。少々身勝手ですが、朝夕の涼しさから、あの夏の暑さが恋しくなってしまう。体調を崩されてはいませんか。

本校では今月の6日に、年に一度の書写の大会、「席書大会」が二年ぶりに開催されます。この大会に携わっている関係から、今年は「コロナによる中止」を回避できて、とてもうれしく思います。本校からは100名ほどの子どもたちが参加します。

この大会では、特選以上に入賞の受賞者を新聞紙上で発表するのですが、最近はその氏名を間違いなく入力するのにとても時間がかかります。名前を漢字表記と異なる読み方にして、文字の意味よりも「音」の響きを優先させている(例えば「亜斗夢さん」→アトムさんなど。)、または外国語の単語に変換し、音を使う(例えば「明日さん」→ともろうさん、「五月さん」→メイさんなど。)名前が多くなってきているのです。名付けに全く問題は無いですし、名前への思いや発想に感服するのですが、「ふりがな」からの変換と漢字との照合には時間を要します。

このように、名前に限って述べますとごく最近の話になりますが、日本語の漢字には昔から、特別な読みをするものが結構あります。いくつか挙げてみると、日頃から頻繁に使っていることに驚きます。

例えば、「大人」。「大」にはタイ、ダイ、おおーきいという読みはありますが、お、とか、おと、という読みはありません。「人」もジン、ニン、ひと、とは読みますが、な、とか、とな、とは読みません。「時計」も「計」はケイ、ですが、「時」にト、と言う読み方はありません。このように、2字以上の漢字が結びついて特別な読み方をする言葉は、常用漢字表の「付表」に116語掲載されています。「七夕(たなばた)」、「今朝(けさ)」、「一日(ついたち)」、「部屋(へや)」などまだまだあります。

さすがにこれらの特別な読みは、入力するとたちまち変換されるので、大人のわれわれが間違えることはありませんが、子どもたちにとってはやや難関です。学習した新出漢字に読み方がないわけですから、特別な読み方をする漢字が出てきたときには、一つの「単語」として読みと意味を理解することが必要です。国語教科書でも、特別な読みが出てきたときには◆マークを付けて脚注に示すとともに、5年生教科書「漢字の読み方と使い方」で解説しています。さすがに「最近の名前の読み」までは、解説しきれませんが。



紛らわしいもの、もう一つ。本稿1行目、子どもたちの「たち」。「達」という漢字を使いたくなりますが、この「達」はタツ、ダツの読みはありますが、「たち」とは読みません。しかし、特別な読み方をする言葉として、「友達」だけが示されています。よって、「たくさんの人たち」、「君たち」、「子どもたち」と表記するのが正しいですが、日本語ソフトによっては「達」と変換されてしまうものもあるとか。

大人たちにも難関でありました。